

月影



第 35 号

世をすてて

あみだ仏を

たのむ身は

をはりおもうぞ

うれしかりける

永観

(訳)

阿弥陀仏を頼んで

往生をとげるのだから

死を迎えることを思うと

うれしくてたまらない



お念仏に生きて

「もみじの永観堂」として有名な総本山永観堂。

正式名は「禅林寺」といいますが「永観堂」という通称の方が、広く知れわたっているようです。

禅林寺が永観堂と呼ばれるようになったのは、永観律師が禅林寺の住職につかれてからのことです。

自ら「念仏宗永観」と名乗っておられたように、六万遍のお念仏を日課とされ、百万遍のお念仏を修したことも三百回におよんだそうです。

日常生活の中にお念仏があるのでなく、お念仏生活の中に日常がある生活を送っておられた永観律師。「終わり思うぞうれしかりける」

という言葉から、永観律師がお念仏によって至った境地を伺い知ることができます。

また、永観律師は貧しい人々を支援したり、病に苦しむ人たちにも救いの手をさしのべておられました。こうした活動が洛中洛外の人々に支持され、その徳によって、いつしか禅林寺を永観堂と呼ぶようになったのではないのでしょうか。

七十九歳で極楽へ往生された永観律師。来月十一月二日に永観堂で九百回忌法要が厳修されます。

秋のお彼岸終わる

お彼岸中は、ご参詣ありがとうございます。ございました。

お説教では長福寺御住職岡本光正師に、六波羅蜜の一つ「布施」について分かりやすくお話しして頂きました。

その中でも無財の七施、

- ① 身施（親切な行いをする）
 - ② 心施（やさしい心で接する）
 - ③ 眼施（やさしいまなざしをする）
 - ④ 和顔悦色施（いつもニコニコ顔）
 - ⑤ 言辞施（やさしい言葉がけ）
 - ⑥ 床座施（進んで座席をゆずる）
 - ⑦ 房舎施（家で休んでもらう）
- は、誰にでもできる布施の行としておすすめにられました。
- その他、様々なお話を、終始和やかな雰囲気の中でお話し頂き、心落ち着く一時となりました。
- 次回、春のお彼岸もどうぞお参りください。

雑記抄く親のするようになるく

お墓参りについてきた小さな子ども。手押しポンプが楽しくて、ついつい桶に水をいっぱい入れてしまします。重たくなった桶を持ち、水をこぼしながらお墓まで運び、見よう見まねでお墓にお水をかけます。そして、お手伝いがそのうちだんだん水遊びになって叱られて・・・。



岡本光正師のお説教

お墓のお掃除が終わると、家族みんなの手を合わせながら、「そろそろい

いかな」と親の方をそっと見てみると、まだ手を合わせているので、あわてて自分も手を合わせ直します。

親が拝めば子も拝む

拝む姿の美しさ

手を合わせる習慣というのは、こんなふうには小さい頃から身につけていくのかもしれない。

何気ない日常の親の行動や習慣を、親が気付かないうちに、子どもたちはその小さい目でしっかりと見ています。

子どもは

親の言うようにはならない

親のするようになる

という言葉があるように。

平成二十二年十月一日発行

浄土宗西山禅林寺派

常林院

ようかんりっし

永観律師 ってどんな人？

来月十一月二日に、永観律師の九百回忌法要が総本山永観堂の阿弥陀堂で厳修されます。

永観律師というお方は、どうい
うお方だったのでしょうか。

人々のために・・・

東五条の葉王寺に阿弥陀仏を安置し、病人たちを救う活動をされていきました。寺の中に病人用の浴室である温室をつくり、また禅林寺の境内で収穫した梅の実を病人に与え続けておられました。人々はこの梅の木を悲田梅（ひでんばい）と呼びました。

東大寺の別当（管長）に・・・
六十八歳の時。堀川天皇の勅命により、東大寺の別当（管長）に任ぜられました。

みかえり阿弥陀如来とのご縁

永観堂の御本尊「みかえり阿

弥陀如来」。もともとは東大寺の宝蔵に秘蔵されていました。

たまたま永観律師はその尊像

を拝する機会があり、尊像の呼びかける声を聞かれました。そして衆生済度こそ、この仏の本願であり宝蔵にしまっておくのはもったいないと嘆かれました。

これが白河法皇の耳に入り、永観律師がこの尊像を護持し、供養することとなりました。後年、永観律師が東大寺別当職を辞して、尊像を背負って京に入る際、東大寺の僧がそれを取り戻そうと追いかけて京都の木幡まできたところ、尊像は永観律師の背に取り付いて離れず、僧たちはあきらめたといい伝えられています。この尊像、みかえり阿弥陀如来には伝説があります。

永保二年（一〇八二）、永観律師

五十歳の頃です。二月十五日の夜明け前。永観律師は底冷えのするお堂で阿弥陀如来の回りをお念仏しながら行道していました。ふと気がつくといつの間にか須弥壇に安置してある阿弥陀如来が須弥壇から下りて、永観律師を先導し行道をはじめられました。永観律師は驚き、あまりのありがたさに呆然と立ちつくしてしまいます。永観律師が歩みを止めたのに気がつかれた阿弥陀如来は左に振り返り

「永観、おそし。」

と声をかけられました。

永観律師はその尊く、慈悲深いお姿を後世に伝えたいと阿弥陀如来に願うと、阿弥陀如来は左にふりかえった姿のままになったと伝えられています。

お経の話 何が書いてあるの？

浄土宗西山勤行式 (赤本) 解説

三尊礼 (さんぞんらい) ③ 勢至礼

なむ しんきみようらいさいほうあみだー

南無至心帰命礼西方阿弥陀佛

せいしほさつなんしぎ いこうふしょうむへんぎい

勢至菩薩難思議 威光普照無辺際

うえんしゅじょうむこうそく ぞうじょうち えちようさんがい

有縁衆生蒙光触 增長智慧超三界

ほうかいきようようによてんぶう けぶつうんじゅうまんこうくう

法界傾揺如轉蓬 化佛雲集満虚空

ふかんうえんじょうおくねん ようぜつほうたいしよろくつう

普勸有縁常憶念 永絶胞胎證六通

がんばしよしゅじょう おうじょうあんらくこく

願共諸衆生 往生安樂国

三界・・・欲界・色界・無色界。迷いの世界を

意味する。

六通・・・六種の超人的な力。

(訳)

西方彼方にあるという極楽浄土にいらっしやいます阿弥陀さまを深く信仰し礼拝いたします。右の脇侍として阿弥陀さまの智慧を示す勢至菩薩は、想像できないほど、その光明は果てしなくどこまでも照らして下さいます。

縁のある人々がその光明にふれたならば、その者の智慧は大きく増し、迷いの世界から離れ出られることでありましょう。勢至菩薩がお歩きになりあらゆる世界が揺れ動くさまは、あたかも風に吹かれて転がる蓬(よもぎ)のようです。お座りになると大地から仏が雲のように集まって空間に満ち、縁ある人々に常に阿弥陀さまを心に思いうかべ、迷いの世界に生を受ける境遇を永久に絶てば六種の妙なる力(神通力)が得られることを証明しましょう。すべての迷いの世界にある人々と共に願いましょう。阿弥陀さまの安樂な国に生まれることを。

勢至菩薩は智慧の光を持って一切を照らして人々が地獄へ落ちないように救って下さる菩薩さまです。「智慧第一」と言われた法然上人の幼名は勢至丸といたしました。